

周縁部が醸成する都市的活力に関する研究

～平安京の葬地に着目して～

熊本大学 工学部 ○正 員 星野裕司 熊本大学 工学部 正 員 小林一郎

1. はじめに

現代都市における中心市街地の沈滞化や郊外景観に関する問題は、「計画都市」から「生きられる都市」への転換を如何になすかという一体的な課題として捉えることができる。通常あまり視線の配られない都市周縁部(郊外)を、その転換を促す契機として積極的に位置づけ、役割を明確に把握することが本稿の主旨である。

平安京において、日本史上初めて永続的都市が成立した結果、古い共同体が崩れ田園生活から分離した都市民が誕生した。その過程において「生きられる都市」への転換がなされた訳だが、その転換は碁盤目状の街区から東北方に居住域が変化することによって定着した。その原因として、右京が低湿地帯であったという自然条件も考えられるが、加えて、「生きられる都市」へ変貌する過程で周縁部が何らかの重要な役割を演じたのではないかと考えられる。そのメカニズムを検討することは、これからの都市設計や郊外開発において、興味深い視座を与えてくれると考えられる。

そこで本稿では、平安京の葬地を主対象として、どのような地形的特性を有していたのか、諸施設の位置関係はどのようなようになっていたのか、また平安京に対してどのような意味・役割を有していたのか、という3点について、文献調査・地形図解読・現地調査に基づき考察を行う。

2. 立地場所の一般的特性

葬地が立地していた「野」という場所の一般的特性について2点から確認しておきたい。

地形的な特性は山麓の緩傾斜地、すなわち傾斜地でも平野でもない緩やかな起伏を持っている¹⁾ということであり、意味的特性は、「里一野一山」という都市領域論²⁾において、「里＝居住域」と「山＝非居住域」の両者から排除されると同時に、両者を分節する中間領域として設定されていることが挙げられる。

3. 葬地の地形的特性

『史料 京都の歴史』『京都市の地名』を中心に文献資料調査を行った結果、平安京に関係する庶民の葬地として6地域、貴顕の墓所として11地域を抽出した。両者を包含する地域が5地域あるため、それらを整理すると、平安京の葬地は「化野」「嵯峨野」「双ヶ岡・宇多野」「船岡・蓮台野」「神楽岡・白川」「鳥辺野」「深草野」「醍醐」「小野」「木幡」「岩倉」「後山階」の12地域となり、うち7地域は京都盆地内である。

以上の12地域の地形的な特性を分類するために二つの軸を設定した。

①岡野/山野

葬地を構成する主要な地形的要素は、岡・野・山である。そこで、岡を有する葬地を「岡野」として、有しないものを「山野」として分類する。

②凹型/凸型

次に野に対する山の形状に着目する。「凹型」は野を包むように山が存在しているのに対し、「凸型」は、山裾が舌状に延長してきたような形状を有しているものである。

以上から、平安京の葬地を表1に分類する。

表1：地形的特徴による分類

	岡野	山野
凹型	双ヶ岡・宇多野、岩倉 神楽岡・白川、小野	化野、嵯峨野、深草野 後山階
凸型	船岡・蓮台野、醍醐	鳥辺野、木幡

4. 諸施設の配置関係

史料の存在状況から京都盆地内の7地域に限って考察すると、葬地に立地する諸施設は浄土教寺院、別業、御霊社に大別できる。まず、それらの施設がどのような性格を有していたのかについて記述すると以下ようになる。

①浄土教寺院

浄土教は個々人の煩惱と罪惡の自覚を基礎とする

体験的反省的な教えである。平安京の都市民たちは、その教えを通じて新しい都市的個人としての自覚（自己発見）を深めていった³⁾。

②別業

田園生活から切り離された都市民たちは、郊外に別業を営むことで、自然を再発見し、従来の歌枕的・概念的な名所からありのままの自然の名所を成立させた⁴⁾。

③御霊社

庶民に発達した御霊信仰とは、疫病等の災厄を特定の個人霊の祟りに寄託し祭礼を通じて鎮めようというものである。そうした御霊神は、都市神として機能していたものであり、新たな都市的共同体を創出した⁵⁾。

そこで、諸施設の配置関係を、相反する性格を持つ浄土教寺院と別業について、次に御霊社について考察を行う。

浄土教寺院と別業は、前章の地形的区分に従い、凹型の地形においては、奥に浄土教寺院、前面に別業という「直列型」の配置関係を有していた。一方、凸型の地形においては、「並列型」の配置関係を有し、野の入り口となるような部分に浄土教寺院が配置される傾向がある。また御霊社は、岡野においては岡の麓に、山野においては野の端部と山麓が接するあたりにほぼ存在している。

それらの関係を図1に示す。

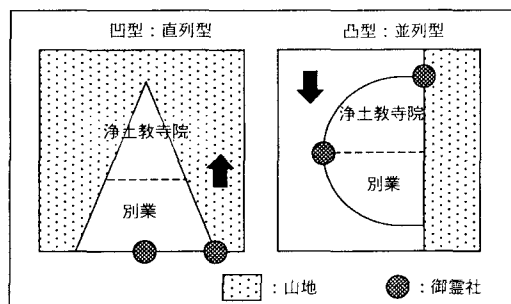


図1：諸施設の配置関係

5. 考察—意味と空間の関係

以上から周縁部における意味と空間について興味深い事実を指摘することができる。

まず、浄土教寺院の配置において、葬地が立地する野の特徴がもっともよく表現されていると考えることができる。つまり、囲まれている空間に

おいてはその奥まったところに、突き出しているような空間では、その突出部に浄土教寺院が存在するというのである。つまり、自己発見の舞台となる寺院は、野の特徴・魅力をもっとも表現している場所であったと考えることができる。（野の魅力と自己発見性）。

一方、自然の発見を促す別業は、葬地を背景や入り口として有していた（自己発見を背景・入り口とした自然の発見）。

また御霊社は、新しい都市共同体を創出する庶民の祭礼の場という性格から、野という微地形の中から、親しみやすく誘目性の高い場所（小さなランドマーク）を選択していたのではないかと考えられる（小さなランドマークと共同体の創出）。

6. おわりに —「野」の風土性

本稿では都市的活力醸成の舞台になった平安京周縁部について空間的・意味的な考察を行った。そこで最後に、「野」の風土性という観点について指摘しておきたい。和辻哲郎は「風土」を人間に自己発見を促す契機として捉えた⁶⁾。また、その概念を発展させたオギュスタン・ベルクは、文化と自然という2項間の運動が生じる場＝「間の場所」として「風土」を捉えなおし、その舞台で生じる運動を通じて和辻の言う自己発見が生じることを示した⁷⁾。

本稿で論じた「野」という空間は、まさにベルクのいう「間の場所」であり、そこで演じられた役割や意味は「野」の風土性が発現されたものと考察することができる。つまり、今後の都市計画や都市設計において、豊かな風土性の発現する場所として郊外や都市周縁部を積極的に位置づけることが、奥行きのある「生きられる都市」を創出する重要な要因となるのではないかと考えられる。

【参考文献】

- 1) 柳田国男,地名の研究,ちくま文庫,1990,pp64
- 2) ここで言う都市領域論は福田アジオの村落領域論を参考とした。福田アジオ,村落領域論(日本村落の民族的構造),弘文堂,1982,pp222
- 3) 石母田正,中世世界の形成,東京大学出版会,1957,pp238
- 4) 高橋康夫,都市と名所の形成(季刊自然と文化),観光資源保護財団,1990新春号,pp6
- 5) 井上満郎,御霊信仰の成立と展開(民衆宗教史叢書第5巻御霊信仰),雄山閣出版,1984,pp119
- 6) 和辻哲郎,風土,岩波文庫,1979
- 7) 特・ユル・ベ・ル,風土の日本,ちくま学芸文庫,1992